

# 佐賀市 6 歴史探訪

## こう どう かん あと 弘道館跡

弘道館は、天明元(1781)年、佐賀8代藩主鍋島治茂の時、藩校として佐賀城下松原小路に建てられたものです。

教授には、「寛政の三博士」として知られる古賀精里が任じられ、藩士子弟の教育に努めました。

10代藩主鍋島直正の時には、北堀端に移して整備拡張されました。ここでは、学習が強化され、朝6時から8時までと9時から12時まで、午後は1時から5時まで、夜は、6時から10時まで授業があったそうです。授業の内容は中国の学問である儒学や佐賀藩の歴史、武道などがありました。いわゆる「葉隠」が授業で用いられたことはなかったようです。

弘道館の食事は、非常に質素だったようで、寮生活を体験したことがある歴史学者の久米邦武によると「朝はたくあんか菜漬、昼はちょっとご馳走で夜は2杯の量り飯に塩だけであった。」と思いを語っています。

幕末から明治にかけて活躍した副島種臣、大隈重信、江藤新平、大木喬任、佐野常民らも弘道館出身者です。開校以来明治5年に廃止されるまで約90年間、佐賀藩の人材育成がなされました。今、弘道館の建物は残っていませんが、その跡地には往時をしのぶ「弘道館跡」の碑が建っています。



▲鍋島家資料を展示している徴古館



▲弘道館跡の碑

### 一口メモ

○弘道館跡には鍋島家資料を展示公開している「徴古館」があります。江戸時代の御道具類や古文書など、明治、大正、昭和に至る鍋島家に関する資料あるいは郷土関係の書画類などの資料が保管されており、順次公開されています。建物は平成9年に国の登録有形文化財に指定されました。

○徴古館入口の植え込みに「石敢當(いしがんと)と刻まれている石碑があります。起源は中国に求められ、辻々の道ばたには「魔よけ」として建てられているものです。わが国では、沖縄や鹿児島には多く分布していますが、北部九州ではあまり見られません。



▲徴古館入口の石碑

